



国立民族学博物館編集

2006
3
March



特集

博物館で総合学習

日本人とついで地球人として

●宮本 亜門

一一 九歳ではじめて演出をした。オフ・ブロードウェイのようなスタイルが話題となり、私は新しいタイプの演出家と呼ばれるようになった。それから数年後、「違いがわかる男」として演出家を生業としていたとき、ロンドンのパブで観劇の帰り、友人とビールで乾杯していたら、隣にいたイギリスの若者が絡んできた。

彼は突然、中国人なのかと聞く。私は日本人だと答えると「日本人は中国の隣人だ。今、天安門で何が起きているか知らないで飲んでいるのか」とつかつかってきた。もちろん学生たちが広場を占領しているのは知っていたし、関心もあった。しかしその夜、戦車が天安門広場に突入していたとは知らなかった。すぐに家に帰り、テレビの画面から流れる情景を見ながら、日本は中国の隣国であり、暗闇のなか、隣人たちの流血騒ぎが起きているという事実を刻んだ。わかっていると思っていたのに、いつの間にか私にとつての隣人はニューヨークであり、イギリス人になっていた。世界中で演出をと、若いとき

から飛び回って勉強し、ブロードウェイやウエストエンドの劇場街のことは熟知していたが、もっとも近いアジアのこと、沖縄のことさえまったく知らなかった、というか興味が湧かなかつたのだ。それから私は、アジアのミュージカルと題して、天安門事件を題材に舞台を作った。それはあまりに無知な自分への戒めでもあった。作曲をお願いしたのがシンガポール人のデリック・リー氏。彼と打ち合わせをするためにシンガポールに行つたとき、「亜門は、日本軍がここで何をしたか知っているの？ お互いの国を越えて創作する以上、歴史を知っておいてほしいんだ」と言われた。

昨年ブロードウェイで『太平洋序曲』を上演した際も、アジアアメリカンの俳優たちと仕事をして感じた。彼らもアジアとアメリカの狭間に生き、それぞれが異なる歴史のなかで自分たちのアイデンティティを探しているのだ。私にも日本で生まれた理由があるはずだ、パスポートひとつで世界を知ることができる。世界には人の数だけ生き方があり、人の数だけ文化がある。



イラストレーション：栗岡奈美恵

みやもと あもん／1958年生まれ。演出家。オリジナルミュージカル『アイ・ガット・マーマン』で文化庁芸術祭賞を受賞。オンブロードウェイにて上演の『太平洋序曲』はトニー賞4部門にノミネートされる。ミュージカルのみならず、ストリートプレイ、オペラ等を手がけ、また空間演出、講演などを通して活躍の場を広げている。http://www.puerta-ds.com/amon/

目次

CONTENTS

- エッセイ 世界へ世界から
- 01 日本人として、地球人として
宮本亜門
- 02 特集 博物館で総合学習
民博の資源を
教育に活かすために
福岡正太
体を通して学ぶ子どもたち
今井ユミ
進化し続ける「みんぱく」
高市亜紀
フィールドワーカーになってみよう
加藤謙一
- 11 表紙モノ語り
お化けの金太
日高真吾
- 12 みんぱくインフォメーション
友の会とミュージアム・ショップからのご案内
- 14 退職にあたって
結末なき終わり
野村雅一
忘れえぬ人びと
泉 幽香
- 16 手習い塾
エチオピア文字で名前を書く②
柘植洋一
- 18 地球を集める
チベット、
ボン教のマンダラとタンカ
長野泰彦
- 20 生きもの博物誌
羊飼いの受難
渡辺和之
- 22 見ごろ・食べごろ人類学
死を願う人
清水郁郎
- 24 特別展
みんぱくキッズワールド
次号予告・編集後記

個を尊重し、地球がひとつであることを私は今、日本人として、そして地球人として体験させてもらっている。

特集

博物館で総合学習



極北を生きる

アンデスの玉手箱

ジャワ文化をまとう

イスラム教とアラブ世界の暮らし



ブータンの学校生活

ソウルスタイル

インドのサリーとカルター

プリコラージュ

「総合的な学習の時間」が小・中学校に本格導入されてから4年が過ぎようとしている。民博でも、学習キット「みんなばつく」（=写真、詳細は7ページ）の利用や展示見学を織り込んだ教育プログラムの開発がおこなわれている。民博がもつ研究資源は、授業に活かすことができるのか。鍵は先生と民博、そして市民ボランティアの連携にある。

民博の資源を教育に活かすために

福岡 正太（ふくおかしょうた） 文化資源研究センター

「みんなばつく」で深める文化の理解

民博は、世界中から集められたたくさんのモノをもっている。さまざまな社会で実際に使われていたモノは、多くのことを私たちに語りかけている。もし、これらのモノに自由に触れることができたなら、見ただけではわからないいろいろな発見をすることができるだろう。色や形、手ざわりやにおい、重さ、使い心地……そこには、文字で学ぶ知識を補うものがある。

スーツケースにつめられた貸し出し用の学習キット「みんなばつく」は、民博が集めた世界中のモノを教室に届けようと開発された。地域やテーマにそって、モノやモノについての情報を記したカード、本やビデオといった関連資料などがバックされている。子どもたちは、実際にモノを手にとり使ってみたり、身につけてみたりしながら、それを作り出した人びとをめぐって想像力を働かせ、五感を通してふ

くらませた具体的なイメージによって文化の理解を深めていくことができる。

民博の資源を活かした教育プログラム

この「みんなばつく」の開発や改良には、たくさんの方の先生の見意が生かされてきた。さらに現在、民博は先生と共同で、「みんなばつく」の活用や展示の見学を核としながら民博の資源を活かした教育プログラムの開発に取り組みは始めている。

民族学・文化人類学の研究所としての民博がもつ資源は、展示だけではなくとまらない。展示されていないモノ、図書や映像音響資料などの資料、資料に関連する大量の情報、さまざまな分野の研究者、多くの人脈や関連機関とのネットワークなど、有形無形の資源を民博はもっている。第一線の研究資源をいかに学校教育に活かしていくか、これは研究を社会に位置づけるという民博の課題である。

とともに、学びの場を多様化させ、校外で総合学習を進める先生たちの課題でもある。

子どもと展示の仲立ち

一方、学校による博物館利用において一番望まれているのは、博物館スタッフによる解説や指導だろう。現実には、子どもたちと展示の仲立ちをする十分なスタッフをもてない博物館が多いなか、市民ボランティアがその役割を担うケースも増えている。専任の教育スタッフをもちたい民博においては、一昨年発足したみんなばつくミュージアムパートナーズ(MMP)が、展示場での教育活動の実験に積極的に取り組み始めている。

博物館を子どもにとって魅力的な学習の場とすることができるといっては、先生と博物館スタッフ、そして市民ボランティアがどれだけ真剣に協力しあうかにかかっている。民博を舞台にして進められている教育プログラム開発の試みについて紹介する。



民博でおこなわれた教育プログラムのオリエンテーション



モノから異文化に出会える



ワークシートに取り組み小学生



ドラは単調だが、リズムの要になる

小学校は、毎年、六年生が民博に行っている。人権をテーマに、ともに生きることを目指した学習に取り組むなかで、朝鮮文化の理解のため、民博常設展の「朝鮮半島の文化」展示を見学に行くというものだった。資料の豊富さと学校の取り組みの継続性から、民博を利用するのは当然の流れだった。しかし、今回に関しては、躊躇する特別な事情があった。この六年生は、昨年、民博の特別展「アラビアンナイト大博覧会」に行き、衣装を試着したり文字を教えてもらったりとたくさん体験をした。もちろん、常設展も見ている。例年のようにただ見学するだけでは、子どもたちの満足感を得られない。私は、明確な方針を

決められないまま、「総合的な学習の時間」の「共に生きる——在日朝鮮韓国の友だちと共に」の準備を進めていたのだ。「アラビアンナイト大博覧会」で、子どもたちに体験プログラムの指導をしてくれたのも当時発足間もなかったMMPのメンバーだった。民博の展示を活用した学習プログラムの開発に取り組みはじめたMMPの協力の下で、授業を工夫することができそうだった。伏見南浜小学校は京都朝鮮第一初級学校と一六年に及ぶ交流があり、向こうの子ともたちを招いて、楽器の演奏や踊りなどを全校児童に見せてもらったり、学校紹介をしてもらった

りしている。例年、六年生は、学校訪問をして向こうの六年生に学校案内をしてもらい、一緒に遊んでくる。今年度は、昨年の民博での活動を踏まえ、グループごとの交流会で、シングルを教えてもらったり、最後には、一緒にチエギチャギで遊んだりしてすっかり親しくなつて帰ってきた。友だちになつた人のことをもっと知りたいという思いを相手の文化を知ることへと高めることが、民博での学びへと結びついていく。

民博にやってきた

民博でのプログラムは、全員に向けての三〇分のオリエンテーションに続き、一三、四人からなる六つのグループに分かれて二〇分間ずつのプログラム六つを体験し、最後に二〇分間のまとめをおこなうという構成だった。六つのグループが六つの場所を二〇分ずつ回るといのは、シンプルで子どもたちにも伝えやすかった。

MMPからはじめに提案されたもののうち、ビデオ上映については、直接体験を重視したいという点からはずしておこうと考えた。それに、民博のビデオは、そもそも小学生向きにはできていない。

一方、伏見南浜小学校では、読み聞かせの研究をしている元教員が、

年に二回ボランティアで全学年に読み聞かせをしたり、教員が月ごとに回りの学校へビデオ放送を使って絵本などの読み聞かせをしている。そこで、MMPのメンバーで読み聞かせの活動を続けておられる方をお願いした。

まずオリエンテーションで、プロジェクトを使って、絵本「フリちゃんの子」を読んでもらった。これは、現代韓国の都会に暮らす子どもが田舎へ行き、昔ながらの行事に触れるという内容である。子どもは展示物を見ても昔ながらのものか新しいものか区別がつかないことが多いので、理解に役立つのではないかと考えた。

続けて、楽器の演奏を全員で聴いた後、子どもたちはグループごとに分かれていった。六つのプログラムのひとつに、酒幕(家。旅人の憩いの場。実物大複製。入ることができぬ)のなかでオンドルにあたりながらの読み聞かせがあった。そこでは、日本の昔話に似通つたものや朝鮮独特の感じがするものをお願いした。似通つた文化、また、異なる文化への思いをもたせたかった。

語り手がチマチョゴリを着て読み聞かせ、オンドルに当たるには立て膝のほうが暖かいという実用性を伝えるものすばらしいプランだった。立て膝や、ご飯茶碗を手にもたないといった

「聴く」から「演奏してみる」へ

「始作(さあ、始めましょう)」

指導者の掛け声で、それぞれの楽器がリズムを刻みながら響き合い、心地よい音楽になる。四人の子どもたちは、今、楽器を手にしてそれぞれのパートのリズムを順に教えてもらったばかり。それが、指導者の小さな鉦(ケンガリ)に合わせて一心に楽器を打ち鳴らし見事に合奏していく。予想通り、子どもたちは抵抗なく演奏を楽しんでいた。異なる文化の音楽を、聴くだけでなく実際に演奏すること。これは、このプログラムでもっともこだわったスタイルだった。

「総合的な学習の時間」を民博で

民博の社会連携スタッフからみれば、ミュージアムパートナース(MMP)とともに授業を作らないかと提案を受けたのは、願ってもないタイムリーなことだった。

私の勤務する京都市立伏見南浜



教えてもらったばかりなのにすぐにリズムを覚えて演奏する。民博セミナー室にて



チマチョゴリは日本人にも結構似合う



酒幕の外でチエギチャギ。すぐ上手に遊べる

体を通して学ぶ子どもたち

——みんなくミュージアムパートナースとともに

今井 ユミ (いまい ゆみ) 京都市立伏見南浜小学校教諭

作法の違いはその国の文化であって、日本の価値観でははかれないということも、同時にきちんと伝えておきたかった。

小学生は結構やる！

体験という点では、楽器があるならば見たり聞いたりするだけでなく、ぜひ演奏させたかった。チャングなどの打楽器で四小節程度のものならば、リズム打ちを音楽の授業で楽しんでいる子どもたちであり、簡単なリズムをパートに分かれて打つことはきっと楽しいに違いない。二〇分の時間ではとても無理といわれていたが、冒頭の場面のように子どもたちは苦もなく楽器演奏をやり遂げた。指導担当の方



「みんぱく」のなかにあった箸は金属製でとても長い

が、二時間以上にわたって次々と代わる子どもたちに丁寧な指導をしてくださったことも大きかった。

衣装の試着プログラムでは、着付けをする人数に限りがあり、二〇分全員は無理ということだったが、子ども同士で着せ合うことで衣装の数さえ確保できれば、かなりの人数が試着できる。小学校の六年生は、着ることも着せることも喜ぶという、自立した年ごろである。MMPの心配をよそに、本番では女子用五着と男子用四着の衣装を次々と着たり着せたりしていく。衣装を着けた姿を互いにカメラで写し合う時間も十分取れた。



酒幕の外をスケッチ。大きなかめは何に使うのだろう

ヤギでしっかりと楽しんでた。すぐに遊べたのは、一度、初級学校でやっていたからだ。しかも、前回と比べてキンキラの飾りがあるほうがやりやすいとまで気がついている。

酒幕での読み聞かせを待つ間、外観のスケッチをしたり、家のなかの様子をみたりしていた子どもたちが促されて家のなかに入っていく、床の暖かさに「ああ気持ちいい」と床にころころと寝転んでしまう場面もあった。

心があったが、このあたりの関心のもち方は、大人の思惑を超えていて、狙いと外れてしまうこともあり、物集めの難しさを感じた。それでも、給食に使う長い金属製の箸やスプーンには文化の違いを感じ取っていた。

理解は今できなくとも
「みんぱく」を使ったプログラムでは、ソウルの小学校に通う男女の子どものもち物などが並べられた。男女のリュックの似通った点に子どもたちの関



屏風には、両班の理想的な人生が描かれているらしい

今回のプログラムは、子どもに説明するというのはほとんどない。けれど、豊富な民博の財産を使って、MMPの多大な労力に支えられて、楽しみながら体を通して感じたり考えたりしたものは心に残る。ばらばらになった学習の断片がいつか子どもたちのなかでひとつにつながり、より豊かな在日朝鮮韓国の友だちとともに生きることにつながっていくことを願っている。

進化し続ける「みんぱく」

高市 亜紀

(なかいちあき)

情報企画課情報企画係

子どもたちの興味を喚起

民博の貸出教材である「みんぱく」の運用を開始して現在四年目に入った。当初から大変好評で、年間一四〇件ほどの利用がある。利用者の約半数が小学校で、総合学習、国際理解教育、人権学習、民博への校外学習のためといった目的で、事前学習、事後学習、学習発表会などに利用されている。それらの学習のなかで、「みんぱく」は、子どもたちの興味を喚起したり、実際にモノに触れる体験で知識を補うものとして位置づけられているようだ。

「みんぱく」の利用者には使用した感想をアンケートで答えていただいている。利用者の生の声は、今後の改善や、新バック作成の指針として貴重な資料となっている。実際に先生が子どもたちと利用して初めて気がつくことなど、博物館で日々「みんぱく」の管理者として触れている者が思いもつかないこともアンケートは教えて

くれる。総合学習の現場において、「みんぱく」は更なる改良を求められていることを実感する。また同時に肯定的な評価もたくさんいただき、さらに充実させたいと思う力にもなっている。

アンケートから見る「みんぱく」の役割

アンケートから利用者の声を少しご紹介しよう。

「同じ「調べる」という活動でも、インターネットを使った活動と、実物を使った活動では子どもたちの反応がちがう。実際に触ってみることで多くのことを発見し、多くのことを感じるこができたように思う」

「本物には、はかりしれない存在感と説得力がある。バックの中身を見せたときの子どもたちの反応や目の輝きは忘れられない」

「得た知識を定着させるのにも有効である」
また、児童が「みんぱく」を利用し

た感想を思い思いに書いてくれることもある。

「インターネットや本では見ることしかできないけれど、実物は生地の薄さや厚さがわかるので、調べるのがとてもはかどった」

「お札に書いてあることや小銭の形、裏に描いてある絵などの違いを調べる

のが楽しかった。ああいう勉強ならもう一度やりたいと思った」

「調べて考えるよりも「みんぱく」から出てきたモノで勉強した方がわかりやすかった」

子どもたちがモノから得ることは、モノについての情報やその地域についての知識だけではない。やはり体感でし

8種類の「みんぱく」

バック名	バックの中身
極北を生きる …カナダ・イヌイットの アノラックとダッフルコート	トナカイやアザラシの毛皮でできたアノラックやブーツ、布製のダッフルコート。
アンデスの玉手箱 …ペルー南高地の祭りと生活	ティンタ村の人たちの日常着と祭礼衣装、たくさんの楽器。
ジャワ文化をまとう …サルンとカイン	インドネシア・ジャワ島の人たちの衣装や装身具、衣装に施されているバティックとよばれる、ろうけつ染めの道具など。
イスラム教とアラブ世界のくらし	衣装のほか、イスラム教にかかわる祭具や日用品。
ブータンの学校生活	子どもの日常着や学校で使っている教科書やノート、弁当箱。オプションとして弦楽器「ダムニョン」も用意。
ソウルスタイル …子どもの一日	ソウルの子どもたちが使っている学用品や衣装。オプションで楽器バックと布団バックを用意。
インドのサリーとクルター	インドの民族衣装のサリーとクルターのほか、装身具など。
プリコラージュ	ブリキ缶バック、タイヤのサンダルなど、プリコラージュなモノのたちや特別展の作家の作品と制作風景紹介など。

*写真は2ページ参照。教育機関、各種団体等に貸し出しをおこなっています。まずはご連絡ください。
*申し込み・問い合わせ先 / 「みんぱく」担当係 TEL:06-6876-2151 (代表)
*ホームページ / <http://www.minpaku.ac.jp/museum/kids/minpack/>

か得られない何かがある。たとえば、バックのなかのモノを通して異文化と出会ったとき、それを実際の

生活に使っている人たちに思いを馳せ、世界にはいろんな生活を送っている人があるのだと気づくことであったり、

自分の日常に再度目を向けることであったり……それは十人十色であったりもいふのだ。

これからの「みんなばっく」

昨年の夏、利用を考えている方などへ参考になるよう、活用事例を紹介する「さのみんなばっく」というページを当館のウェブサイトに開設した。実際に学校を訪問して、授業に参加させていただき、授業の様子を全体の流れがわかるように写真入りで紹介している。いろいろな利用法を共有できればというスタッフの思いと、利用者の声から実現した「みんなばっく」の新たな展開である。これは担当者にとっても非常に大切なことである。バックの利用現場を見ていると、さまざまな課題が鮮明に浮かび上がってくる。バック内の情報の充実、視聴覚教材の充実、バックの種類の実実等、アンケートにもよく書かれていたことだが、実際に目の当たりにすると課題の具体的な姿と、それに対する解決策の糸口が少しずつ見え始める。

利用者の声をすべて実現することは難しいが、できる限り形のあるものにしていきたい。これからも、もっと学びの楽しさを感じることができるよう、「みんなばっく」は進化を続けていく。



韓国と日本の教科書の違いを比べてワークシートに書き出す



日本と韓国の伝統衣装の違いについて気づいたことを発表



グループの発表後、全員で「みんなばっく」のモノを見学する

フィールドワーカーになってみよう

協働プロジェクト実践の現場から

加藤 謙一

(かとうけんいち)

文化資源研究センター研究総関研究員

触れて学びを深める

「これサササや。何でできてるんやろ」
「うわっ、この服、臭うわー」

九月のある日、豊中市立泉丘小学校では、民博の学習キット「みんなばっく」と五年一組の子どもたちとの出会いが始まっていた。彼らが手に取っているのは、「極北を生きる——カナダ・イヌイットのアノラックとダツフルコート」バック。アノラックの放つ強烈な臭いに対する子どもたちの反応を確認して、担任の中野義澄教諭が筆者に説明を促す。異臭の正体は、アノラックの素材であるカリブーの毛皮であること、零下三〇度くらいになる極北の地では、その臭いがほとんどしないことを伝えると、教室中から驚きの声が上がった。

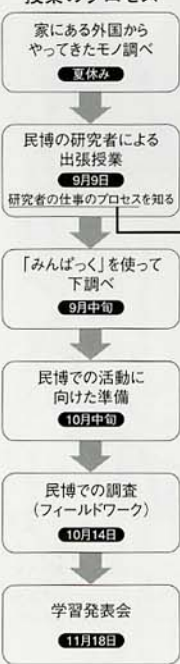
子どもたちに話した内容は、「みんなばっく」に入っているモノ情報カードに記載されている。「みんなばっく」は、

単に民族資料の体験にとどまらず、このように解説情報や映像資料を教師が授業の展開に合わせて子どもたちに提示することで、学びを深めているように工夫されている。

学校と進める協働プロジェクト

民博では、昨年度から民博の文化資源を学校現場で効果的に活用できるように学習プログラムの開発と試行に関するプロジェクトを立ち上げた。プロジェクトでは、ひとつの授業のいろいろな過程で「みんなばっく」の利用や民博への見学などを取り入れた授業プログラム作りを、民博と協力校との協働でおこなっている。プロジェクトリーダーは、海の中道海洋生態科学館の館長で、教育プログラムを館の看板メニューに育てた実績をもつ高田浩二客員教授である。筆者は当時、情報企画係の博学連携スタッフとして、高田氏のアドバイスをもらいながら、協力校とのプログラムおよびワークシ

授業のプロセス



研究者の世界



トの開発と試行に関わる機会を得た。プロジェクト発足当時からプログラムの開発と実践を協力して進めてきたのが、冒頭の泉丘小学校の中野先生である。今年度は、昨年度と同じく五年生の二期の「総合的な学習の時間」を使って、国際理解をテーマに、プログラムの開発と試行をおこなってきた。

六月から始まったプログラムの打ち合わせで、中野先生からは、民博の展示場での取り組みを授業全体の中

心的な活動に位置づけたいということ、そして子どもたちに民博で働く人との出会う機会を設けたいという希望があった。話し合いを重ねていくうちに、展示場での活動を授業全体の文脈のなかでどのように位置づけ、そこに向けて、子どもたちの学びへの意欲や期待をいかに盛り上げていけるかがポイントになるといふ点で一致した。そして研究者との出会いをきっかけに、子どもたちが民族学研究者になり、「みんなばっく」を使った下調べを経て、

研究の営み、学びの営み

発表後に記された子どもたちのコメントには、活動のなかで生まれたさまざまな思いが詰まっていた。「世界にはいろいろなものがある」「(身の回りのモノと)似ている物もあったけどぜんぜんちがう物もあった」とは、世界の人びとが使うモノの多様性への驚きと同時に、自分たちの暮らしとの比較から得た言葉だろう。彼らの視点は、モノの多様性とともならず「それぞれの地方にそれぞれの生活があった」というように、そこに生きる人びとというように、そこに生きたモノの多様性と実感をともなうモノの観察と記録を通して異文化との対話の経験(「フィールドワーク」)をまたやりた「フィールドワーク」をまたやりた」という言葉で記してくれた。そして「モノから疑問がわいた」という一言を残してくれた子どもは、研究者のまなざしを少なからず体得してくれたにちがいない。中野先生をはじめとする先生方も、子どもたちが自分で対象を決めて調査を意欲的にこなしている点を評価していた。

この授業プログラム作りを通じて筆者は、博物館は研究の成果はもちろん、成果を生むまでの研究者のまなざしや思考、そして課題と向き合う彼らの姿勢そのものも学びの素材として成立するだろうと実感している。三月一六日から始まる特別展「みんなくっつくワールド」でも、民博の研究者の部屋が再現されることになっている。ここでは、研究の際に用いる道具や資料を実際に手に取って確認してみることで、研究者が味わう発見の喜びや葛藤も経験できるだろう。学校関係者向けには、「みんなくっつく」展示コーナーや民博利用に関する相談窓口も開設する。本展は子どもに育まれてきたかを、さまざまな民族資料を通して紹介する、体験的要素にあふれた展示である。

今回、授業プロセスとの対応を試みた民族学研究者の営みは、「成果の発表」という段階を終えたからといって完結するわけではない。その営みは、発表後のさまざまな反響から新たな問題を発見し、次の調査に向けた準備をはじめとする循環運動を続けて深められていくのだ。子どもたちにも、異文化との出会いをきっかけに生まれた新たな興味関心、そして解決し得なかつた疑問を探求していきたくいう、学びの営みを持続していつてもらいたいと願っている。



野林助教授がリュックから取り出す道具に子どもたちも興味津々



127通りのフィールドワークが展示場で展開した

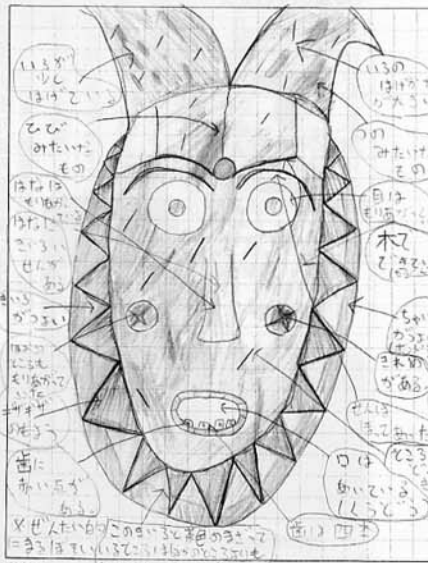
異文化のモノにあふれる展示場でフィールドワークをおこない、その成果を発表するという流れができあがった。図にもあるように、「みんなくっつく」の利用以降の活動の流れは、研究者の仕事のプロセスと一致するように組み立てた。

民族学者と出会い、民族学者になってみる

プログラムは、家にある外国からつてきたモノを調べるといふ夏休みの課題から始まった。子どもたちは、普段から見慣れたモノと向き合い、その新たな一面を発見し、使う人びとの思いや記憶がモノに刻まれていることに気づくことができた。続く「民博教員の出張授業」では、台湾や中国で、イノシシやブタと人との関係に関

する調査研究を続けている野林厚志助教授が、教室を訪ね、民族学や民博のこと、そして研究者になつたきっかけなどについて子どもたちに語った。また、調査にもつていくリュックサックから、計測用の機器から下着までを次々と取り出し、たとえば「夜中に屋外にあるトイレに行くときには、このヘッドランプが必需品」といった具合に、使う場面や用途を紹介していった。フィールドワークでは、調査結果をスケッチとメモで記録する。子どもたちは、夏休みの課題でおこなったこととの共通点に気づくことになった。

野林氏の研究の進め方やフィールドワークについての語りも、子どもたちの「調査」へのイメージを具体化させた。それは、「みんなくっつく」を使っておこなった下調べでの彼らの意欲的な姿



豊中市立泉丘小学校5年生の男の子が、ナイジェリアのイビオ族の仮面について記入したフィールドノート。選んだモノのスケッチをして、特徴を書きこむように作られている

を見れば明らかだ。イヌイットのブーツを人念にスケッチし、サイズをはかって記録する男の子。ダブルコートの手口からのぞく美しいフェルトの模様や、腰部にほどこされた不思議な出っ張りを見せ、うれしそうに筆者に教えてくれた女の子。みんな自分で発見した情報を記録しようと夢中になっていた。調査の準備の段階では、下調べで生まれたモノやその地域に対する各自の興味や関心を、展示ガイドや民博のウェブページを見ながらふくらませて、展示場でのフィールドワークの対象となるモノを決めていった。

一〇月一四日、泉丘小学校の二七人の民族学研究者たちは、入念な準備を経て民博を訪れた。これまでの活動を研究者の仕事と重ね合わせ

表紙モノ語り

お化けの金太

特別展「みんなくっつくワールド」出展作品/お化けの金太(標本番号H12085、高さ16cm 幅5cm 奥行7cm)

日高 真吾
文化資源研究センター



わけだが、目玉の間隔が広い。紐をきちんと引つ張らないと表紙のような白目になり、まさに「お化け」みたいになる。このようなおどろおどろしさも、この玩具のもっているおもしろさだ。

「お化けの金太」もそうだが、郷土玩具は日本各地の風土や伝承を題材として作られる。木や土、紙などの身近な材料を使って、子どものために

作った玩具が起源となる。江戸時代にこれらの玩具は、社寺の縁日や門前市などで売られ、参詣者らの土産物として全国に広まり、玩具の主流となつていった。明治時代になると、西洋諸国との交流が進み、ブリキやセルロイドで作られた西洋の玩具が国内に大量に輸入された。そして、これらの玩具は、たちまち全国を席巻し、それまで不動の人気を誇っていた郷土玩具を押し

退 職 に あ た っ て

3月末で野村教授、泉助手が、民博を定年退職します。民博での思い出、今後の抱負などを綴っていただきました。

結末なき終わり

野村 雅一 (のむら まさひと) 先端人類科学研究部

三月末で民博を去ることになります。長年勤務してきて申し訳ない気もしますが、正直、なんの感慨もないのです。しかし、感慨というものにもこだわると、三年前、ちょうど六〇歳をすぎたころ、おどろいたことがあります。還暦です。本卦にかえるのだそうです。自分の父親にはみんなで赤い頭巾をかぶらせ、赤いちゃんちゃんこを着せたのをおぼえています。しかし、わたしはまわりのだからからまなにもいわず、気がついたら六〇歳をすぎていました(満年齢ですが)。それで、何年も無沙汰していた敬愛するある先生におもいきって電話してみました。「はくも六〇歳になりました。なにか心境の変化でもおこるのではないかとおもっていたんですが、なんにもおこらないです。そんなものでしょうか」と唐突な質問をすると、先生は電話口で爆笑された。その先生は八〇歳になられたということでしたが、年齢の風景も年齢によつてかわつてくると話しておられた。加齢はだれにとつてもその都度、初体験だとよくいわれますが、そのことをおっしゃっていたのか。もしかして赤頭巾をかぶせられたわたしの父親もなにも感じるものはなかったのだろうか、とおもいました。

きつた還暦体験がきっかけになったとおもいます。もっとも、その少し前にも頼まれ仕事でエイジングにかかわる発表をしたことがあります。二〇〇〇年八月にフィンランドでひらかれた「ヨーロッパ日本研究者協会大会」に招待された際、せつかくだからオリジナルな報告を、「ガングロ」など日本の十代のファッションとボディメイクングについて研究しました。その翌年には東京銀座産生堂の「サクセフルエイジング講座」のホスト役をうとめる機会をあたえられ、老いについて勉強しました(一連のトークは「老いのデザイン」野村雅一編著、求龍堂、にまとめています)。

しかし、エイジングの問題もふくめ、以前から続けてきた人間の身体表現の研究にちよと新発見があったかとおもったのは、二〇〇〇年春の企画公演「みんばくミュージアム劇場」からだは表現する」をとりしきったときです。民博の特別展示館に円形劇場をつくって、世界のトップ・パフォーマンスを招いて身体表現の可能性について考えようという、博物館には無謀な企画でした。それは、前からあった別の計画が頓挫した拳句、世紀の変わり目になにもないのは淋しいということ御鉢がまわってきたと記憶していますが、依頼されてから公演開催まで一年もない状況で、わたしにとつてもまさに一世一代の大芝居になりました。その成果



撮影:フリースペース・海野豊世

京都大学大学院文学研究科博士課程中退。京都大学文学部人類学専任講師を経て、1978年に民博着任。総合研究大学院大学文化科学研究科教授。身ぶりやしぐさを含む人間の多様なコミュニケーションを世界規模で研究する。また、イタリア、ギリシャなど南ヨーロッパの民俗文化を研究。著書に「しぐさの人間学」(河出書房新社)「老いのデザイン」(求龍堂)「身ぶりとしぐさの人類学」(中央公論新書)「ボディランゲージを読む—身ぶり空間の文化」(平凡社ライブラリー)など。

忘れえぬ人びと

泉 幽香 (いずみ ゆか) 民族社会研究部

在籍した三〇年間で特に思い出深いのは、民博一〇周年記念イベント「みんばくこんびゅう」とびあ——世界の文字・音楽・仮面」のメンバーに加わったことです。仮面を担当した私は、マルチウインドウ・システムを標本検査に適用するため、コンピュータに入力した画像や情報から仮面を選び出す作業を受けました。

仮面は儀礼や舞踏・祭でよく用いられます。世界の仮面には、人、獣、爬虫類、虫をかたどったものや、それらを組み合わせたものが見られます。神聖、邪悪など、特別な意味や性格を象徴した仮面もありました。イベントで使用される仮面標本の画像をよびだす属性を一枚ずつカード化する作業では、各地域を専門とする多くの研究者にご協力いただきました。

インドの古典叙事詩「ラーマヤナ」「マハーバーラタ」の登場人物の仮面については、サンスクリット古典祭祀儀礼の専門家、井狩彌介先生、水ノ尾真吾先生。二つの叙事詩がインドネシアに伝わったあとの物語については、故吉田集面先生と吉本忍先生。南インドからスリランカの、疾病を退散させる厄病神の仮面については、田中雅一先生。新大陸では、イロクオイ族の神様によばれて柱の陰に隠れた際、鼻が曲がってしまった鼻曲がり男の面、メキシコ先住民の二重の神聖性をあらわす老人の面、

神殿などの水口に置かれたというジャガターの仮面などについて、中南米を専門とする黒田悦子先生と八杉穂穂先生。アフリカのカメルーンやナイジェリア連邦共和国で多く見られる祖霊の仮面については端信行先生。民博を去った方や故人も多いが、ともにプロジェクトのメンバーとして立ち働いた仲間たち、そしてお世話になった皆様の面差しは今もなお忘れがたいものです。

フィールド調査で印象に残っているのは、カナダ西部アルバータ州西南部の平原先住民の雄ブラックフットのリーダー、ジョージ・クローウ・シユウ氏のことです。ロッキー山脈の東側フットヒルの一角にあるセンター内の青少年教育室には、彼の生涯にわたるすべての所蔵品が収められていました。私が訪れた一九九八年当時、文化担当であるお嬢さんのルイザさんに、お父様の一番大切なものを尋ねると、一隅に飾られたハツファローのローハイド(蘇)していない生皮)のアンペロフ「パフレッシュ」を指し示されました。アンペロフとは、日常品や書類、乾燥肉と加工抽出された脂肪とペリりを発酵させた保存食品「ベミカン」や、場合によっては水もいれることができ、馬での運搬も可能な革製の風呂敷です。通常は、部族や家族ごとの意匠が施されているのですが、それは平原先住民の代表的なモチーフ「熊の爪(またはファイブ・コーナース)」も、ジグザグ模



撮影:福永幸治

東京大学大学院社会科学研究所修士課程修了。東北大学大学院教育学研究科博士課程中退後、東北大学教育学部助手を経て、1975年に民博着任。専門は、日本およびフランス農村社会に於ける家族生活の比較文化的研究。論文等「視覚的思考をめぐる覚え書——構造主義の交換論的視点から」(『国立民族学博物館研究報告』)「『構造』認識の『認識構造』序説——レヴィ・ストロース『交換論』の認識地平をめぐる若干の考察」(『社会学年報』)など。2005年には国際シンポジウム「発酵食品と感覚受容」を主催。

様の雷(稲妻)紋も何もない、無地の品でした。儀式の用具でもなく、それらを容れる器「ナトワ」でもなく、鷲などの鳥の羽のついた頭飾りでもなく、身近なアンペロフを選ばれたのは、彼の実直な性格をよくあらわしているように思えました。白人と一度も戦わずにブラックフット内の三トライブ(部族)間を調整し、率いてきた氏は、実在そのものがシンボルたりえた例といえるかもしれません。そして、それこそが未来の青少年たちに託したかった彼の想いだっただけではないでしょうか。



2001年アルバータ州クラーサムソンキャンピングにて、ファンシー・ダンサーの少女たちと。母方の亡くなった近親のデザインを継承した衣装をまわって踊る

エチオピア文字で名前を書く ②

柘植洋一 (つげよういち)
金沢大学教授

今回は、まず図に示した拗音の系列の書き方を
見ていこう。シャ行、チャ行、ニヤ行、ジャ行は対応す
るエチオピア文字がある。これらはそれぞれ基本的
にサ行、タ行、ナ行、ダ行の文字に頭に横線を一本
引いた字形となっていることに注意されたい。キヤ、
ギヤ、ミヤ、リヤ、ビヤ、ピヤ行については、イ段
の文字とヤ、ユ、ヨの組み合わせで表記することに
なる。キヤ≪キ+ヤ、キュ≪キ+ユ、キョ≪キ+ヨという具
合だ。

詰まる音「ツ」については、アムハラ語でも詰まる
か詰まらないかは大事な発音上の特徴としてある
が、カナと違ってそのための特別な手段をもっていない
。したがって羽田(ハタ)さんと八田(ハツタ)さん
は文字で書くと同じハタハタになつてしまつたので、八田
さんは羽田さんでないことを書いた文字を見せて、
はつきり発音して違いを強調する必要がある。

次に、延ばす音について見てみよう。日本語では
オジサンとオジーサンのように母音の長短の使い分
けは重要だが、アムハラ語ではそうではない。したが
つて文字上でその違いは反映されない。たとえば小
阪(コサカ)さんと高坂(コーサカ)さんは、エチオピ
ア文字で書くと、どちらも同じコサカになつてし
まう。ただ、どうしてもはつきりさせなければ、高
坂はコオサカというように書くと、きちんと読ん

でもらえる(例2)。
以上のことを総合すれば、東京はトキヨ、京都
はキヨト、北海道はホカイド、と書けばよいこ
とがわかる(例3)。こうして字形をしつかり覚え
れば、どんな日本語の単語や名もエチオピア文字で
書き表すことができる。ただ、もし日本語文を書
く場合は、「を」は普通の「オ」で、「は」は「ワ」
と、発音通りに書く必要がある。

では、例4をみてみよう。カラテ(≪先手)はその
ままアムハラ語で使われ、実際、エチオピアで出版さ
れた代表的なアムハラ語辞書にもこの語形で載せら
れている。ただし、日本語からの借用語とは書かれ
ていない。エチオピアを歩いている日本人だと見ると
、「カラテができるか?」とよく聞かれるが、これはプ
ルース・リーの映画を通じての現象で、彼を日本人
と勘違いしている人も結構多いようである。

次に、本当の(?)日本人、それも女性でおそら
くもとも有名なのは、「おしん」ではないだろうか。
テレビの普及率はまだまだだが、数年前にエチオピ
ア国营テレビで放映されて大変な人気を博した。
ヒロシマ、ナガサキは、学校教育を受けた人には
東京と並んで、日本を代表する地名として知られて
いる。
宣伝ではないが、ソニー、トヨタは優れた日本製品

を代表するブランドとして、誰もがあこがれる名前
である。
最後にジヤン(≪ちゃん)はもちろん日本語ではないが、残念
ながら(≪ホン、ニッポン)といつてもエチオピア人には通
じないので、これくらいは覚えておく必要がある。
たとえば言葉がでなくとも、エチオピア文字を書い
て見ただけでエチオピア人は目を丸くして驚くに
違いない。そこから新しいコミュニケーションが生まれ
るかもしれない。



アジスアベバから南へ下った地域にみられるオロモ人の墓碑。ホル・バリーサ
ーと名前が記されている

拗音の書き表し方

	ア段	ウ段	オ段
キヤ行	ካሃ ካሃ ካሃ	ካህ ካህ ካህ	ካዕ ካዕ ካዕ
シャ行	ሻ ሻ ሻ	ሻህ ሻህ ሻህ	ሻዕ ሻዕ ሻዕ
チャ行	ቻ ቻ ቻ	ቻህ ቻህ ቻህ	ቻዕ ቻዕ ቻዕ
ニヤ行	ኘ ኘ ኘ	ኘህ ኘህ ኘህ	ኘዕ ኘዕ ኘዕ
ヒヤ行	ኘሃ ኘሃ ኘሃ	ኘህ ኘህ ኘህ	ኘዕ ኘዕ ኘዕ
ミヤ行	ሚሃ ሚሃ ሚሃ	ሚህ ሚህ ሚህ	ሚዕ ሚዕ ሚዕ
リヤ行	ሪሃ ሪሃ ሪሃ	ሪህ ሪህ ሪህ	ሪዕ ሪዕ ሪዕ
ギヤ行	ኘሃ ኘሃ ኘሃ	ኘህ ኘህ ኘህ	ኘዕ ኘዕ ኘዕ
ジャ行	ጃ ጃ ጃ	ጃህ ጃህ ጃህ	ጃዕ ጃዕ ጃዕ
ビヤ行	ቤሃ ቤሃ ቤሃ	ቤህ ቤህ ቤህ	ቤዕ ቤዕ ቤዕ
ピヤ行	ፒሃ ፒሃ ፒሃ	ፒህ ፒህ ፒህ	ፒዕ ፒዕ ፒዕ

ቅዱሳን መጻሕፍትን በማንበብ ነፍስዎንና አእምሮዎን ይመግቡ ።

የመጻሕፍት ቅዱስ ማኅበር አባል በመሆን ማንበሩን ይርዱ ። የኢትዮጵያ ፡ መጻሕፍት ፡ ቅዱስ ፡ ማኅበር ። THE BIBLE SOCIETY OF ETHIOPIA

☎ 518233 ☎ 1252 ☎ 413455 ☎ 700
አዲስ አበባ ኢትዮጵያ

የቅዱስ መጻሕፍት ማኅበር የሰዓት ሰንጠረዥ

ቀን	ሰዓት	ጊዜ	ቀን	ሰዓት	ጊዜ
1	8:00	10:00	1	8:00	10:00
2	8:00	10:00	2	8:00	10:00
3	8:00	10:00	3	8:00	10:00
4	8:00	10:00	4	8:00	10:00
5	8:00	10:00	5	8:00	10:00
6	8:00	10:00	6	8:00	10:00
7	8:00	10:00	7	8:00	10:00
8	8:00	10:00	8	8:00	10:00
9	8:00	10:00	9	8:00	10:00
10	8:00	10:00	10	8:00	10:00
11	8:00	10:00	11	8:00	10:00
12	8:00	10:00	12	8:00	10:00
13	8:00	10:00	13	8:00	10:00
14	8:00	10:00	14	8:00	10:00
15	8:00	10:00	15	8:00	10:00
16	8:00	10:00	16	8:00	10:00
17	8:00	10:00	17	8:00	10:00
18	8:00	10:00	18	8:00	10:00
19	8:00	10:00	19	8:00	10:00
20	8:00	10:00	20	8:00	10:00
21	8:00	10:00	21	8:00	10:00
22	8:00	10:00	22	8:00	10:00
23	8:00	10:00	23	8:00	10:00
24	8:00	10:00	24	8:00	10:00
25	8:00	10:00	25	8:00	10:00
26	8:00	10:00	26	8:00	10:00
27	8:00	10:00	27	8:00	10:00
28	8:00	10:00	28	8:00	10:00
29	8:00	10:00	29	8:00	10:00
30	8:00	10:00	30	8:00	10:00
31	8:00	10:00	31	8:00	10:00

エチオピア暦を記したカレンダー。まず目の中心に書かれているのは独特のエチオピア数字。エチオピア暦は9月11日から始まって13か月からなる。年の数え方も西暦とはずれていて、西暦2006年3月1日はエチオピア暦1998年イェッカーティート月22日となる

例1 ハタ/ハッタ 例2 コサカ/コーサカ コオサカ
ሃታ ኮሳካ ኮኦሳካ

例3 東京 京都 北海道
ቶኪዮ ኪዮቶ ሆካኢዶ

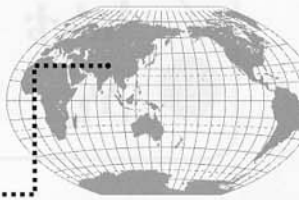
例4 カラテ オシン ヒロシマ ナガサキ
ካራቴ አሺን ሂሮሺማ ናጋሳኪ

ソニー トヨタ ジャパン
ሶኒ ቶቶታ ጃፓን

「手習い塾」は今回で終わります。

チベット、ポン教の マンドララとタンカ

長野 泰彦 ながの やすひこ
人間文化研究機構理事
民族文化研究部



「ポン教」とは 修験道のようなもの

チベットと聞くと、「ラマ教」とひらめく人がいる。本館の展示にもその言葉は用いられているから、一応ポピュラーな名前と言えらるだろうが、ラマ教という宗教はない。この用語は、モンゴルに布教に来ていたカトリックの宣教師団がそこにおこなわれていた宗教を指して名づけたものである。それがたまたまチベット大乘仏教だったので、それ以後、チベット仏教全般をもラマ教と言いつつ慣わすようになった。ラマ教と名づけた理由は、「ラ」（生命の根源の意）を託する師を大事にするることによるが、その理屈をゆけば、どの宗教もラマ教になってしまう。

チベット大乘仏教は七世紀にヤルン家がチベットにはじめて統一王朝を立てたとき、統一のイデオロギーとして公的にインドから導入された。聖徳太子による仏教導入の事績とよく似ている。チベットにはそれ以前からポン教という宗教があったのだが、統一王朝がまずしなければならなかった仕事は、ポン教とそれにつながる世俗勢力の力を削ぐことであった。ポン教自体、チベットにもとからあったものではないらしく、伝

承によれば、西方から移入された。また、統一政権が目ざしたほどには組織化されていなかったが、民間信仰やシヤム等の上層的要素と密接な関連を保ちながら、特に葬送儀礼において独自の体系を築きあげていったようだ。仏教側からの迫害は、七世紀以降二〇世紀にいたるまで断続的に続き、ポン教集団は（中央チベットから見れば）辺境の地に追いやられた。中国青海省、四川省、雲南省、甘肅省、およびヒマラヤ南麓などであるが、少数集団ながら、現在でも強固にその伝統を保っている。一方、チベット仏教はポン教から多くを学び、多くを借用した。チベット仏教の哲学・儀礼の随所にポン教からの影響が認められる。

日本における宗教事情との対比から、ポン教を日本の古い神道にたとえる人がいるが、私はチベットの仏教もポン教も、日本でいえば、修験道だと思う。ポン教のほうがやや原始的な修験道といえるかもしれない。修験道が日本の狩猟採集文化を背景とする基層文化を色濃く反映しているのと同様、ポン教はチベット仏教よりは古い精神基層を保存していると考ええる。ただ、日本にはポン教研究の基盤そのものがない。世界的に見ても、研究は仏教に比べ、はるかに遅れている。そのような状況を改善するため、一

九九五年度以降ポン教文化研究に注力してきた。

私はチベット・ビルマ歴史言語学を専攻しており、ポン教徒達が話していたとされるシヤンシュン語（九世紀には死語となった）の再構成に興味があったのだが、その関係でポン教文化全般を扱うことになったのである。研究基盤整備として、シヤンシュン語再構成に有用な未記述言語の調査研究、ならびに、ポン教関係の典籍と図像資料の収集をおこなうこととした。ポン教には宗派がなく、仏教におけるタライ・ラマのような存在もない。したがって、典籍にせよ、図像資料にせよ、何がオーソドックスかがわからない。一世紀以降仏教の動きに刺激されて、多くの典籍類が書かれ、編纂されたが、それが仏教でいうカンキュル（経部）やテンキュル（論部）のような体系をなすに至らなかったらしい。

五台の、パソコンを もっこんで目録作成

一五世紀になって典籍類の体系化がおこなわれ、カ（仏教の経部に相当）やカテン（論部）にまとめられたが、「カ」はともかく、「カテン」は下位分類に貫性がなく、付属する目次にも信

できたのである。

ポン教の体系を示しうる 世界唯一の資料

マンドララやタンカそのものに美術的価値を認める立場もあるが、民族学に従事する者にとつては、ポン教徒の宇宙観をシステムとして理解することが第一であり、その作業を文献整理の段階からおこなえたのはラッキーというべきであろう。マンドララとは神々のパステルを真上から見た二次元図像であり、多くは幾何学的絵柄をなす。これに具体的な神格を落とし込んだものがタンカ（いわゆる仏画）である。また、マンドララとタンカの本来の用途は、僧が瞑想するとき、瞑想の順序やゴールを間違えないように横においておく「参考図」であって、大変実践的なものである。この点、マンドララを仏像がわりに尊崇の対象とする日本とはずいぶん異なる。

マンドララとタンカそのものは、ティエンノルブ寺をネパールに再建したテンジン・ナムタク座主の出身地、中央チベット北部のキムボ地方に在る絵師に依頼した。伝統的な書き方と技術を身につけているからである。サムテン・カルメイ氏、立川武蔵氏博名誉教授と筆者が科研の調査などを利用して、数回にわたり、できた図像と儀軌を突き合わせる作業を繰り返し、二〇〇四年度にやつすべの図像が揃った。

民博のポシ教図像資料はこのようにして収集された新しいもので、古美術としての価値はないが、体系を示しうる世界で唯一の資料である。この成果は「国立民族学博物館調査報告」の二二号および六〇号として公開されている。



ゲニェン・テクペー・マンドララに対応するタンカ（標本番号H221434）



ゲニェン・テクペー・マンドララ（標本番号H221529）



テンジン・ナムタク師

頼性がなかった。したがって、われわれの仕事はまず經典プロパー以外の文献がつかまえて、カテンの目録を整備し、何がどこにあるのかを特定することから始まった。一九九七年春、五台のラップトップコンピュータをネパール、カトマンズのティエンノルブ寺にもちこみ、目録の作成を目

指した。厄介だったのは、コンピュータのネパールへのもち込みだった。当時、コンピュータは輸入すると三〇〇パーセント課税対象となる物品だったからだ。科研の分担者が一台ずつ抱え、どうにか無事税関をすり抜けたときはほっとした。次なる難関は、何ゆえに「目録」を作らねばならないのかをポシ僧に理解してもらうことだった。彼らの勉強方法に由来する知識と記憶力は抜群で、すべての經典は彼らの脳の中に「リニア」に納まっているから、別に目録など必要としない。中途半端に西欧の論理によって仕事をしているわれわれのほうがおかしいのである。

この調子だと、コンピュータの操作を教える段にならたらどうなることかと心配していたが、杞憂だった。もちろん、コンピュータ用語をチベット語で表現するのには至難の業である。チベット人学者、サムテン・カルメイさん（二〇〇三年度外人客員教授）にとつてさえ、だが、アシスタントが英語で（チベット人学者は英語はまったくわからない）説明しつつ、入力方法を实地に示すと、三〇分後には彼らは自分たちで直接入力し始めた。驚くべき好奇心と理解力である。

こうしてできたカテン目録をもとに収集すべき図像資料の選定が始まった。極めて迂遠な手順だったが、これが逆に幸いした。仏教の場合、テンキュルのなかに図像同定の文献があるのではなく、種々の文献類から抽出された図像に関する儀軌（規則）と解釈が別に編纂されている。サキヤ派の「ギムデー・クントウ」はその典型である。ポシ教の場合はこれがなかったため、われわれの手で儀軌を論部文献群から抜き出し、学僧の説明を受けつつ、体系を再構成することが



ヒマラヤ山脈の高山草地。森林保全が叫ばれるたびに、ヒツジやヤギは草地や森林を破壊する元凶に仕立てられる



キャンプで露営する羊飼いたち。彼らは男ばかりで移動しながらヒツジを飼う



ナギ村でサムダイの役員と交渉する羊飼い



移動する羊飼い。彼らは300頭から500頭前後のヒツジを連れて移動する

羊飼いの受難

渡辺 和之
(わたなべ かずゆき)
 国立民族学博物館外来研究員

を得ない以上、羊飼いは住民との関係を調整しなければならぬ。こうしたなかで、彼らは黙って相手に従ったのではない。羊飼いは、規則を盾に、規則以外の話に耳を貸さないサムダイに対し、

し、規則を用いて切り返した。かくして彼らは暫定的ではあるにせよ、森林政策が変化するなかでも、放牧を継続しているのである。その後、ネパールでは治安が悪化した。西ネパールで蜂起

したマオイスト(極左ゲリコ)、その鎮圧をめざす政府との武力闘争は全国展開し、この地域にも拡大した。移動する羊飼いの受難は、まだまだ続きそうである。

森林保全と放牧料

「ここで放牧してはならない。ヒツジは森林の若芽を食べるし、村のウシやヤギの草まで食べてしまう。どうしてもここで放牧するのなら、お金を払ってもらおう」

一九九八年三月、東ネパールのナギ村でのことだった。

そう詰め寄られたのは、ルムジャタル村の羊飼いである。彼らは三〇〇頭から五〇〇頭のヒツジを連れて、ヒマラヤ山脈の高山から低地まで季節的に移動する。彼らに自分たちだけの放牧地はない。羊飼いはゆく先々の村で放牧料を支払い、ヒツジを放牧する。

男はナギ村のサムダイの役員と名のつた。サムダイとは、ネパール政府が森林保全を目的に、各地で導入した森林利用者組織である。政府は住民に国有林の管理を任せ、森林の保護育成を試みた。これに伴い、ナギ村のサムダイは、村にくる羊飼いや放牧料を徴収しはじめた。彼らが要求した放牧料はよその村と較べて、とてつもなく高いものだった。

「ヒマラヤから平原まで、われわれは四つの郡で放牧している。四つの郡にいくつ村がある？ たった二日放牧するだけなのに、何がお金だ！」

彼らは自分たちの立場を訴えた。しかし、男

は規則を盾に一歩も譲らなかった。

「これは私たちが作った規則なのだ。郡の認可も受けている」

結局、羊飼いは男の条件をししぶと飲んだ。草の少ない場所を連日移動したため、ヒツジもかなり弱っていた。

どこへ行つても「金、金、金」

翌日、今度は隣村の男たちが放牧料を徴収しにきた。羊飼いは「あなたたちは郡の認可を受けているのか？ 認可がなければ、お金を取る権

利はない」と反論した。すると、男たちは黙り込んでしまい、お金も取らずに帰っていった。それでも羊飼いは自らを用いた戦術の効力をまだ疑っていた。「きつとまたお金を取りにやってくるだろう」と。そこで、彼らはおも一日放牧する予定を切り上げ、翌朝早くナギ村を発つたのである。

「どこへ行つても、金、金、金だ。これじゃ、おちおち放牧できない。羊飼いはいった。

移動する羊飼いにとつて、サムダイの導入は新たな受難のはじまりだった。自分たちだけの放牧地をもたず、移動する先々の村で放牧せざる



ヒツジ

(学名: *Ovis aries*)

ネパールで飼養されるヒツジの多くはバルワール(Baruwal)とよばれる在来種で、山地での移動や森林での放牧など、改良品種では耐えられない環境でも放牧できる。羊毛は粗く太いが、洗うと縮む性質を持ち、フェルトの織物に加工される。老齢やケガで「歩けなくなったヒツジ」は生きたまま仲買人に売られ、肉として都市の市場に送られる。



集まった老人たち。儀礼の算段をみんなで相談している



村で行事があるとき、いつも最初に老人たちに食事と酒がふるまわれる

疾く死なばや

数年前に北タイの山地で出会ったアカの老人が忘れられない。八〇歳を超えたその老人が阿片常用者であることは、青ざめた顔色とやせこけた体つきから隠しようもなかった。老人は、長年の喫煙の習慣ゆえ肺が悪く、ある日、隣家に住み込んでいたわたしのところに薬を所望に来た。

「弟よ。胸がゼーゼーと鳴ってとても苦しい。なにか薬を分けてくれ。そうしないとわたしは死んでしまうよ」

わたしは、あまりに具合が悪そうな様子になんとかしてあげたかったが、あいにくその症状に効きそうな薬は持ち合わせていなかった。とこ

ろがそれ以来、老人はほぼ毎日、日課のようにわたしのところを訪れるのだ。

「弟よ。今日もわたしは具合が悪いよ。おまえの薬でどうにかしてくれ。でないと死んでしまう」。しかし、わたしに頼んでもどうにもならないことを悟ってか、老人の言葉は月日を経るごとに、「どうにかしてくれ」から「どうにか早く死にたい」という独り語りに変わっていった。

「ああ、苦しい。こうなったら早く死にたいよ」「わたしはもう生きていたくない。早く死んでしまいたい」

そして村人たちは、「あの人自身も、われわれみんなも、あの人がもうすぐ死ぬのはわかっているんだ。その準備もしているよ。だからおまえもあの人と同じように早く死にたいよ」と

にな」と淡々と言うのだ。結局、この老人はそれから一年ほど生き延びた。死の直前にも、わたしのところにやつのことで歩いてくるなりべたりと座りこみ、同じ言葉を述べたものである。

老いを生きる

老人がいよいよ衰弱し、今日か明日かという状態に至ったときのことを思い出す。老人は、かつて村長をつとめたことがあり、さらにアカの儀礼や宗教について卓越した知識をもっていたので、アカの社会で一目置かれていた。そこで近隣遠方からわりなく親類縁者や知人がいる村に使いが出されて死の予兆が伝えられた。村の内外から老人の家に集まってきた大勢の縁者らは、当の老人に対する最後の「精力をつけさせる儀礼」の様子を静かに見守った。そして死の当日。一族を今日まで支えたひとりの偉大な人物の死は、集まった者たちに大きな悲しみをもたらした。

老人が亡くなるまでのあいだに、わたしは死をめぐるとくさんのことがらを老人から教えられた。死は肉体がなくなるといふひとつの通過点に過ぎない。死はほんのひとときの状態なのだ。死のあとには、冥界で祖霊としての長い「人生」がはじまるのだから。

老人は、恐ろしがることも嘆くこともなかった。死が確実に自分に訪れると悟つてからはそれを受け入れたし、死を待ち焦がれてさえいた。祖霊になり、子孫を見守り、子孫から手厚くまつられることに喜びを見出していった。

冥界に行くためには、老いることが必要な過程である。しかし、ただ老いればいいというわけではない。「よく老いる」ことが冥界への道を開く。夫婦仲よく暮らし、子孫を残すこと。今日

魂の役割

冥界に行きついた魂は、折にふれて家にあらわれる。子孫が憂いなく暮らしているか、見るためである。そのとき子孫は、祖先に献上する食べ物や飲み物を用意することに腐心する。粗相があれば、祖先からそっぽを向かれてしまい、安寧な暮らしが保証されなくなるからだ。日々の暮らしのなかで、祖先に見守られているという感じが子孫に計り知れない安心感を与える。死は、残された者たちにとっては悲しいできごとだが、その悲しみは日々を生き抜く力に遠からず転化されていくのである。

ところが最近では、老いても死も安心して迎えられるなくなりつつある。老いて死のうにも、それを受け入れる子孫がすでにいないこともあるからである。たとえばここ数年、タイで社会問題になっている覚醒剤にからんで、多くの若い世代が命を落としたり刑務所に入った。農業をいくらか続けてもいた現金は稼げない。ならばと、違法だがうまくいけば巨額の現金を稼げる覚醒剤の売買に手を染める者、現実逃避や快楽のために服用して中毒になる者があとを絶たない。また、仕事や学業などのために都市へ出て行った若年層も戻つてきそうにない。残っているのは老人ばかりという村は多い。冥界に行きついた老人はいつまで子孫を見守りつつけられるのだろうか。



棺は太いオガタノキをくり抜いて作られる。縦1.5m、横0.6m、脚の部分も含めると高さ1.5mほどもある。冥界へ飛ぶ鳥にたとえられる



葬式の一場面。棺の前で、冥界へ行くためのまじないの言葉が述べられる



棺の運び出し。墓地に埋葬された故人の魂は祖霊になり、後に家に戻ってくる



故人に水牛を供養する。水牛は冥界への旅程での食料になる

死を願う人

見ごろ・
食べごろ
人類学

清水郁郎

(しみず いくろう)
大同工業大学助教授

編集後記

今年度2度目の博学連携の特集を組みました。前回の7月号は、外から民博を利用することに主眼をおいたものでしたが、今回は民博側から外に向けた取り組みのいくつかを取り上げています。民博は、研究所と博物館という珍しい取り合わせの組織ゆえ、ほかでは考えられないようなことができる可能性がまだまだあると思っています。

最近、目標に達したのかとか、業績がどうなのか、評価がやかましくなりました。勢いがあれば、成果を問う必要も暇もないはずですから、いまの世が衰えている証拠といえるでしょう。明日さえわからないのに、何年も先の目標に縛られて汲々したり、評価のために仕事をしたり、本末転倒というべき滑稽なことが身近で頻発しています。貧すれば鈍すると言うべきでしょうか。21世紀に入って、どんどん悪い方向に進み出しているようです。しかしやがて深く物事を見つめ、考える学問が必要とされる日がくるのではないのでしょうか。精進していきたいものです。

早いもので『月刊みんぱく』の編集長として編集作業に携わって一年が過ぎました。至らぬことばかりだったにもかかわらず、なんとか任期を終えることができたのは、言葉工房や千里文化財団の皆さんのお蔭です。広報企画室や情報企画課、そして編集委員の方々にも助けてもらいました。新しい体制にかわっても引き続きご愛読くださるよう、切に望んでおります。

(八杉佳穂)